

今月のテーマ



## キキンニ

(ナナカマドとエゾノウミズザクラ)  
村木美幸 (アイヌ民族文化財団常勤理事)

アイヌ文化のことをもっとも話したい!  
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で  
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。



二〇二〇年、思いもよらない新型「コロナウイルス」感染症の感染拡大に、パンデミックやロックダウン、緊急事態宣言、など聞きなれない言葉が飛び交い、世界中が翻弄されてきましたよね。アイヌにおいても流行病は恐ろしいもの。病気を振り撒く病魔、悪神を避けたり、払ったりするのにカムイノミなどの祈りとともに、植物のカムイ(神)がその特性を活かし病気を防いでくれると考えられてきました。そんな強い力を持つ植物として今回はキキンニを紹介しましょう。

キキンニは「知里 真志保著作 集別巻Ⅰ分類アイヌ語辞典 植物編動物編」による「クキネ(魔神を追はらうもの、≡棒幣) ne(なる) ni(木)」、「危害を加えようとして襲ってくるもの」に対して、身代わりになってその危険な襲来者を追っ払うもの」とあります。キキンニという名で呼ばれるナナカマドとエゾノウミズザクラは、どちらもバラ科の落葉樹で、強い臭気をもって病神を払うものとして考えられていて、チセ(家)の入口や窓に立てるだけでなく、火にくべたり、水桶の水の中に浮かべておくなどもしたそうです。コタン(村)やチセに近いところとする病魔の鼻も曲



イラスト/ 莊田悠人

がるほどの嫌な臭いを出して頑張ってくれるキキンニカムイ。寝る時には、キキンニを燃やし、その燃え尻を灰の中に刺して、その上に火を埋めておくことと家中にキキンニの臭いが充満して、病気のカムイが家に入ってこれないように、晩中、防衛してくれるとのこと。皆が眠っている間にキキンニカムイと病魔との激しいせめぎ合いが続けられるんですよ。

植物利用やアイヌ料理などについてお話を聞かせていただいた、平取の黒川セツさんのお宅の玄関の両脇に、木の細枝を紐で束ねたものが下げてあったので「これ、何?」と聞いたら「キキンニ、ナナカマドだよ」と教えてくれました。セツさんが子供の頃、風邪ばかり引いていたので、キキンニを刺しておけば風邪除けになると「フチ(祖母)がやっていたこと。」「昔のチセは茅葺(かやぶき)だったからキキンニの枝、刺しとけば良かったけど、今はこうして吊るしてゐるんだ。昔は風邪で熱でも出たらキキンニの皮でも枝でも採ってきてヒエのお粥に入れて、よく食べさせられたもんだ」と、庭にあるナナカマドの木を眺めてました。生活スタイルは変わっても、伝統が継がれていると感じた瞬間でした。



次回のテーマは「アマム(穀物)」  
本田優子(札幌大学教授)が担当します。



### ウポポイ

NATIONAL AINU MUSEUM and PARK  
民族共生象徴空間

北海道白老町にOPEN



ウポポイPRキャラクター  
「トウレットボン」



イランカラブテ  
「ごんには」からはじめる。

■ 本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。  
 ■ 村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。  
 ■ 莊田悠人(しょうたゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。